

## 会派視察所感

視察先・・・ささえるクリニック

視察項目・・・地域で支える医療、介護から女性の雇用と福祉産業を考える

所感・・・

本年2月に行われた周南市議会議員研修会で講師として来ていただいた「ささえるクリニック」の現場を視察させていただいた。

普通の民家を職員自らで改装し、地域医療を従来のやり方ではなく、近所のお姉さん、おばちゃんが働く場として掘り起こし、地域内での経済循環をも活性化させるというまさに一挙三得の方法を展開している。北海道という広大なエリアでの活動のため100キロ離れた場所まで行くこともあるとのこと。(我が市も広いがかわいく見える)

地域医療は、周南市においても「地域医療を守る条例」を制定しているが、常に考えておかねばならず、特に中山間地域においては深刻な問題になる前に対応していく必要があると考える。地域のおばちゃんでも出来ると言われていたが、その核となる医師、看護師の存在があればきっかけにはなると思う。そういった人材の発掘とその地域の意識を高めていくことがまず最初であると考ええる。

都市部での高齢化も進んでいく中で、中山間地域でこういった取り組みが出来るかモデル化して予算投入を含めて早期に検討すべきであろうと考える。また、自宅で看取るというのも多くの方が望んでいるとのことから病院の存在意義、そして治癒しない病気とどう向き合うのかを考えさせられた。

その人にとって何が幸せであるのか、何を望むのか、そういったところを医療従事者が真剣に考え、そしてそれが地域の雇用から経済循環まで好転させることが出来ることを見せられて周南市でも大いに取り組んでみる必要性はあると思った。

「人は必ず死ぬ」という言葉をすごく考えさせられ、死生観までも考えさせられたこの度の視察は大変参考になった。

福田 健吾

## 会派視察所感

視察先・・・岩見沢市役所

視察項目・・・お試し暮らし事業（移住促進事業）  
（栗沢クラインガルテンの現地視察）

所感・・・

岩見沢市総合戦略の人口ビジョンにて自然減、社会減という状態が続くことが表記されている。これは当然周南市でも同様である。特徴的な事業として他所からの移住を促進するためにまずは一度お試し暮らしをしてもらう「お試し暮らし事業」を視察した。

岩見沢市への移住に関心のある方を対象に1週間から2ヶ月の期間で市民と同様の生活を体験してもらうため生活必需品などの備品を備えた住宅を提供しているとのこと。平成28年度は一人一回までとしていたが平成29年度からは回数制限を撤廃した。そのため、悪意を持った利用者が別荘のように利用している実例があることも散目されるとのこと。（近隣自治体でも同様の事業が行われそれを循環している利用者がある様子。夏場の北海道という地域特性、リゾート感覚ではなかろうか）

クラインガルテンは指定管理されている施設でその予算は指定管理料として予算計上されている。利用料だけのペイは不可能とのこと。平均利用期間は概ね1ヶ月とのこと。平成28年度は13組25人が利用。そこから移住にきちんとつながって行くことが重要であるがわずかにとどまる。これは、やはり結びつけ、決断への働きかけが弱いのではと考える。（創業支援や仕事の紹介など）

また、まちなか体験住宅を本年度よりスタートしている。民間のアパートを68000円/月で借り上げ、より実際に近い形でのお試し暮らしであるので今後の結果が気になるところである。周南市においても、中山間地域への移住促進は考えているが中心部での移住お試しということはコンパクトシティの観点からも試験的に試す価値はあると考える。

全国的に地方の人口減少は課題になっているので単なるパイの奪い合いにならぬようにしなければならず、都市部の人口減少策を策定せねば根本的な地方の問題は解決しないと考えている。また、移住促進に力点を置きすぎず、周南市の良さを伸ばし、暮らしやすさを充実させていく中で移住も促すというスタンスが無難であろう。

福田 健吾

## 会派視察所感

視察先・・・東川町役場

視察項目・・・写真文化首都「写真の町」東川町

所感・・・

1985年6月1日に「写真の町」宣言を行い、10年目から全国の高校写真部を対象に「写真甲子園」を始めて今年で24回目とのこと。当時としては目の付け所が独創的で継続することでまちづくり、定住にもつながっている点は非常に評価出来ると思う。また写真映えするまちづくりという目標があるので見た目、風情をしっかりと考えた町並み、景観をつくるため市民も協力し、そのための補助金も行政が出している点は非常に一体感があり共感できる。

行政組織の中に全課にまたがる「写真のまち課」が存在し、全庁的に展開していることも真似たほうが良いと感じる。(何で作るかが重要であるが)

写真甲子園では1週間で4万人以上の集客、数百人のボランティアが参加し、町の一大イベントになっている。こうしたことから映画「写真甲子園」製作事業がスタートした。製作費の1億円に全く一般財源は使われておらず、すべて協賛金とふるさと納税で充当された。この部分も素晴らしいことである。周南市においても見習うべきではなかろうか。今後、広告・宣伝費がいくらかかるか不明であるがふるさと納税(株主制度)でしっかり対応していきたい旨を述べられた。

一番感じたのは、やはり職員が自信を持ってのびのびとこの写真の町をPRしていること、職員一人一人が町長となって責任を果たしているように思えたことであろう。これは、市であるからとか町であるからとか規模は関係なく、そのことにどれほど生きがいを見いだしているかだと思う。果たして周南市ではどうであろうか。そういった意味からも非常に考えさせられた。

文化の面からの写真を考えるということで小中学生の写真少年団も作られている。写真になれ親しむことで自分たちの町は写真の町であることを実感し、自信を持つことでさらなる効果を出せると思う。

写真甲子園出場者が学芸員として関西からの移住をし、定住につながっていることも非常に素晴らしいと思う。何がきっかけになるかわからないが周南市にもこうした移住が増えていくような継続的な施策を打って行かねばならないと痛感した。

福田 健吾





# 視察レポート

お話し暮らし事業について

岩見沢市

岩見沢市においては、総合戦略において「たねもが住みやすいと見えるまちづくり」を基本目標として大まか4つに分け、若者から高齢者まで「たねもが住みやすいまち（基本目標2）」の中で「お話し暮らし事業」が位置づけられている。岩見沢の良さを体験してもらって移住にアゲていくという考えで、市街地に1ヶ所（まちなか体験住宅～民泊アパート貸上か）旧栗沢町に2種類4ヶ所合計5ヶ所を用意している。その中の「栗沢クラインカルテン」を現地視察を行った。

28年度の成果として13組25人延べ377日の利用申込み（稼働率34.4%）があり、20代男性が3名単身が移住した。現在も更なるPR（大阪での移住相談/会等）を通じて本据移住に向けて取り組んでいるところである。

この岩見沢市の長所は北海道最大の大都市札幌市まで40kmの距離にあり、その有住性を活かせるということ。決して多数の移住は早急には実現はむつかしいが、岩見沢ファンを増やしていくことで、カレアではあるが成果を挙げているところを見込める。人口減少社会において地産地消、いかにより人口減少に歯止めをかけるか。その総合戦略のスタンスであるが、全国で多数の自治体が行っている取り組みの中で、大まか成果を挙げているのは同業であるが、地産地消に立ち向かっていかなくてはならない。このお話し暮らし事業がスタートに同市に打ち込んで成果は挙げたいと思う。同市の特性、強み、有住性を分析し同市版を作り上げて実行していくことが不可欠である。

# 視察レポート

写真のまち 東川の 写真甲子園のこくみ

東川町

東川町の写真のまちの視察は1回目と2回目である。林忠彦という若石を  
写真家を生み、「林忠彦賞」を全国発信し、同じ写真のまちというスツンス  
もあり、同じテーマをもった地域であることが、写真のまちにはストリートに  
参考になるように、とても有意義な充実した視察にわたると思われている。

特にこの視察が映画の「写真甲子園」が全国で放映されるというタイミング  
でもあり、後場の職員はそのシーンを着目して業務にあたり、

小森町のストリートでもその映画をホスフーサしたまにスツンスではなして、

町あそびの盛り上げを、成していることが

「写真のまち」という一点のみに集中して、オンラインのまちづくり大会に  
成功している例といえる。映画の効果は絶大であろうが、そのための地道なこくみ  
があつたことである。この写真甲子園も今年で23回目であり、参加高技も  
年々上昇している。何よりも若石の教訓の町を訪ねたこと、その町が  
源流のような気がする。若石のセンス、感性をいかに写真のまちを大きく  
変えていく。この時代も若石を大活躍の原動力とするを改

めよう。

今回の町後場の説明者の1人に若石の学生写真家。大阪で大学まで  
退学後、写真甲子園に参加して大学生としての毎日ボランティアとして運営スツンス  
として働いて、そして東川町に務め、町職員となった。彼女の専ら道二  
存在こそこの事業の成功の原動力であろう。

同町市では同じ写真のまちとして東川町のような全国に発信し、町あそび  
市の大活躍の柱として位置づけられていることが必要であり、いかにして若い  
人たちに力を成していただくか、若いアーティストの存在や創業していただく  
条件整備が何をおいても大切である。そのためには、町あそびのまちを  
はあつてはいいが、その成り立ちをいかにして視察であった。



## 会派六合会 行政視察 《ささえるクリニック岩見沢》

佐々木 照彦

視察項目：地域医療の取り組み

ささえるクリニックの取り組みは、今年2月に議員研修会で講演を拝聴し、今回現場を見て、いろいろな意見がうかがえた。

ささえるの理念は、基本的に医療・看護・介護を通じてコミュニティを守ること。ささえるクリニックは、地域包括ケアシステムの先駆けであり田舎を抱える地域にとっては有効な手段であろう。

訪問看護・訪問介護を充実させることにより、地域で安心して暮らし、最期を看取れる。そういうところがたくさんあれば、地域の雇用も生まれる。ロー川るビジネスにもなり、コミュニティを育むことにもなる。特に女性が笑顔で元気に働ける場所があれば、コミュニティは栄えると力説している。

地方の医療介護人材を確保し、正規雇用を増やすことが重要になってくる。学ぶ場も必要になる。その辺りは、行政が積極的に取り組む姿勢が必要である。(ヘルパーの養成における初心者研修の無料化等)

永森先生の話聞けば、医師不在で今では週に何度か診療所を開設している田舎でも、訪問看護・訪問介護の施設があれば、医者は常駐していなくてもいいのかなという思いになってくる。

2020年以降、都会で暮らすことのできないお年寄りが地方に追い出される時代がやってくる。その受け皿になり得るかどうかは、地域包括ケアシステムを如何にうまく取り入れられるか。市民病院が、如何に急性期病院から脱却できるか。地域医療に興味のある医師の確保など周南市の課題は多い。

我々も、ささえるクリニックのようなまるごとケアの取り組みと市民病院の改革をあわせて、より良い方向に進むよう注視しなければならないと思う。

## 会派六合会 行政視察 <岩見沢市>

佐々木 照彦

### 視察項目：お試し暮らし事業

岩見沢市は、人口約8万5千人。平成18年に北村、栗沢町を編入合併し、以前は交通の要衝として、また豊富な資源開発と生産物資の集散地の拠点として発展した。現在は、水稻を中心とした農業を基幹産業としている。道内有数の豪雪地帯であり、札幌からは自動車、JR何れを利用しても30分の位置にある。

人口減少は、地方においては最大の問題であるが、平成28年度における社会減が緩和傾向（27年度の半分）にあり、その中でも、子育て世代の転出が減少したことは特筆すべきことだと思う。単年では結論付けられないが、岩見沢市総合戦略の施策の効果が表れてきたのか。

- 重点施策
- ・ICTや農業の強みを活かして雇用の創出を図る
  - ・充実した子育て施策を活かした安心して子育てできる環境づくりの更なる推進
  - ・住みやすさを活かした移住の促進
  - ・医療の充実と市民の健康促進等、市民生活の向上を図り、住みよいまちづくりを行う

住みやすさを活かした移住の促進における「お試し暮らし事業」は、市が移住を検討している者を対象に、市内での生活を一定期間体験する体験住宅を5戸用意し、1週間から2か月以内の範囲で貸し出しをしている。昨年は13組25人、延べ377日の利用申し込みがあり、今年に入り移住者があるなど成果が出つつある。

地方のどこの市町も移住・定住には力を入れているので、課題となるのがPRの方法と移住した場合の働き場である。岩見沢市は、わかりやすいパンフレットを作成し関西圏や事務所を構える東京でPRに努めている。働き場に関しては、就農は基幹産業であるのでサポート事業が充実していると思うが、その他の職業を探す場合や起業・創業支援の充実がこれからの課題だと思う。

周南市も移住定住には力を入れているが、ワンストップで解りやすい情報の提供や充実に努め、他市に負けない取り組みをしてほしい。



## 会派六合会 行政視察 <東川町>

佐々木 照彦

視察項目：映画写真甲子園制作事業

東川町は、北海道のほぼ中央に位置し、「大雪山国立公園」の一部になっている。旭川市から車で25分、旭川空港から車で約10分。層内屈指の米どころで、木工業が盛んである。人口は約8,100人。5年前に比べ3.3%増。

1985年にモノではなく文化で町づくりを目指し「写真の町」宣言を行い「自然」「文化」や「人と人との出会い」を大切に「写真写りの良い町づくり」を推進する。これは、優れた自然環境に恵まれていること。当時写真が身近だったこと（カメラ普及率86%）。世界を繋ぐコミュニケーションツールとなること。写真は若い文化であることなどの理由からである。

「写真の町東川賞」を創設し、2017年第33回まで140名が受賞。「写真甲子園」は、写真の町10年目に始まった写真の全国大会。全国の高校写真部に写真の創作を通じ、新しい活動の場と目標、出会いや交流の機会を提供している。1週間で4万人の人で賑わう。ボランティアの協力なくして成り立たない事業であり、町内の「写真の町課」と連携して運営を行っている。写真甲子園OBOGもボランティアとして参加し、中には東川町に移住しその運営に携わっている人もいる。それくらい魅力があるということだと思う。30年目からは「国際写真フェスティバル」を開催し、海外13校国内選抜3校の16校の次世代を担う世界の高校生同士が写真を通じ交流を深めている。

写真に特化し、常に新しい刺激を与えることで、人を飽きさせず事業を進めている。映画「写真甲子園 0.5秒の夏」もそうだろう。製作費を交付金や寄付、ひがしかわ株主制度というふるさと納税で賄い、映画で東川町を全国にアピールする。そしてまた多くの人に東川町に来ていただく。自然環境などの観光資源があるとはいえ、町のPRの方法は見習うべきものがあると思う。庁内間の意思疎通ができており、全体でその目標に向かって取り組む姿勢がうかがえた。議長が、「よその町は商店街は寂れて人が歩いていないといいますが、うちの町は人が歩いていますよ。」という言葉が印象的であった。

質問・答弁及び所感

長 嶺 敏 昭 議員

視察事項 ささえる医療クリニック及びまるごとケアの家岩見沢

所 感 2月に周南市議会議員研修会にお招きしたささえる医療クリニック岩見沢に永森克志先生を訪ね、隣接している訪問看護ステーションなどを運営する「まるごとケアの家 岩見沢」でお話を聞いた。夜はドクター、社労士、看護師、事務員の皆さんが懇親会を企画していただき、意見交換を続け、有意義な視察となった。

病気になったなら、病院で適切な医療を受診するのは必要なことだが、病院はケア（治療）はしてもケア（介護など）してくれるところではなく、家族や近隣の人たちとの関わりの中で自分らしく心地よく生き、終焉を迎えるのが人間的である。これから団塊の世代が後期高齢者となり高齢者が激増していく。ケアこそが必要とされる時代に病院は主役ではなく、制度にとらわれなくて地域がケアの主役になっていくべきであるというのが「まるごとケアの家」のコンセプトであり、在宅医療、看護、介護を地元の人達がアイディアを出し合い、雇用を創出している現場を拝見した。

永森先生は「まるごとケアの家」を新たに始める場合はまず訪問看護ステーションを立ち上げることを勧められる。「看護」さえあれば、その後に「介護」を入れたり「医療」に繋げたり、コミュニティスペースを用意したりと柔軟に動くことができると言われ、地域の意識を高めていくことが一番だといわれる。しかし、私はやはり意識の高い医療者の存在がまずあって、地域と一緒にこれからの地域医療を考えていくのが近道だと思う。常勤医師が不在の鹿野国保診療所を周南市北部地区の在宅医療の拠点にするべく行政に対して様々な提案を続けていこうと思っている。高齢者に優しい地域づくりこそが「まるごとケアの家」につながるのではないか。

六合会行政視察《岩見沢市》  
質問・答弁及び所感

長 嶺 敏 昭 議員

視察事項 お試し暮らし事業

所 感 移住定住対策事業として、各都市で展開されているものの1つであるが、27棟あるクラインガルテンの内2棟をお試し居住施設として提供している。また民間のアパートの一部を岩見沢市が借り上げ、同様に提供している。就農支援のために旧教職員住宅を低家賃で貸付も行っている。現地視察したのはクラインガルテンだが、鹿野地区にある豊鹿里パークと同様な都市と農村の交流施設として整備されたセンターハウスに隣接しており、指定管理で運営されていた。

この事業での実績は芳しいものはないが、県外からの移住につながった例もあるようであった。



六合会行政視察《東川町》  
質問・答弁及び所感

長 嶺 敏 昭 議員

視察事項 映画写真甲子園「0, 5秒の夏」製作

所 感 私としては2度目の東川町訪問になります。前回は写真甲子園事業そのものでしたが、今回はその写真甲子園をテーマに菅原浩志監督が映画を撮るということでの東川町の動きを視察させていただきました。きっかけは周南市で開催された名水サミットの折、講演された菅原監督と松岡町長との名刺交換からであったとのことでした。松岡町長は名水百選の地元鹿野にもお越しいただいております、旧知の方であるので座学の前に表敬訪問させていただきました。

座学では議長、町長が主な説明員としてご臨席賜り、突っ込んだお話を伺うことができました。同じ写真の町を標榜する周南市とは異質のまちづくりへの熱意が感じられるものでした。何しろキャッチコピーが「写真文化首都宣言」とは恐れ入ります。周南市の林 忠彦賞は誇りにすべきものですが、何か権威的で一般市民には文化として認知されていないのが現状であり、もったいない文化資源であると言わざるを得ないと以前から感じていた。

映画を作るには多額の資金が必要ですが、財源は何かとの質問に、ふるさと納税と企業からの寄付金、地方創世関連の交付金の申請で一般会計にはこれまで手をつけていないようであり、感心させられる。映画は完成しているがこれから東京映画祭や海外の映画祭コンペに出品後、11月から全国配信するとのことだが、映画を作るほどの宣伝費がかかることが懸念材料のようである。

東川で感じることは、職員の写真の町への驚くべき熱意の躍動と過去24回開催した写真甲子園に参加した高校生たちが大人になって、その時の感動をそのままに期間中、ボランティアとして参加するという奇跡的な町であるということ、人口も減少傾向あったものが少しずつ増加しているという、羨ましい町であった。

視察でお土産をいただくのは普通だが、東川町の用意するものは半端じゃなく1800円相当の本3冊、東川の米、天然水など恐縮するものであり、おもてなしに手を抜いていないと感じた。今回も刺激をもらった良い視察となった。

会派行政視察《平成29年8月1日》

質問・答弁及び所感

福田 文治 議員

視察事項 岩見沢市 ささえるクリニック

問

答

問

所感

ささえるクリニック岩見沢については、今年2月に議員研修会で医院長、スタッフによる講演会を聴衆した所である。今回現地視察で「ささえるの理念」、人材育成方針を目の当たりにした。

岩見沢市は札幌まで40キロで通勤圏内に有り、若者の定住地域の基幹産業がこれと言って無いため、「医療・介護・看護を通じ地域コミュニティーを守る」を経営理念として、1、主役はまちのおばちゃん、お姉ちゃん、じいちゃん、婆ちゃん2、愛着、覚悟、ものがたりで学歴や職歴でなく地域に対する愛着や覚悟3、仕事はシェアし専門分化しないで補う4、全員経営者としまちづくりを目的とした職員意識。各スタッフの名刺にはそれぞれ長が付いており職員のやる気を促している。夜の食事会にスタッフや関係者が7～8名参加されコミュニケーション、出会いを大切にされている。ささえるクリニックの取り組みは岩見沢市の基幹産業に向けての先進的な取り組み経営であると感じた。財政状況の厳しい地域ほど生き残りをかけ本気で取り組みを実施している。行政だけでなく、民間事業所が地域づくり、若者の雇用の場、定住のため頑張っているのには感心した。

会派行政視察《平成29年8月2日》  
質問・答弁及び所感

福田 文治 議員

視察事項 岩見沢市 お試し暮らし事業

問
答
問
答
所感

岩見沢市は人口約85,000人で平成17年～10年間で約9,000人の人口減となっている

自然動態は少子高齢化により、社会動態は転出超過により減少傾向、その対応として

「岩見沢市人口ビジョン」及び「岩見沢市総合戦略」を策定し人口減少克服のいっかんとして「お試し暮らし事業」に取り組んでいる。この取り組みは岩見沢に定住してもらうために実施しており、中心地に1か所栗沢町に2種類の4か所の住宅を農業サポートハウスを除き1,500円～3,750円/日で全国各地からの申し込みを受け付けている。

13組25人が体験しているとの事。栗沢クラインガルデン2棟は、本市鹿野の豊鹿里パーク施設と同じようだった。利用者は夏のみ別荘代わりに利用する方もいるとの事。

移住サポートも充実しており、住宅購入支援助成金、マイホーム借り上げ制度、空き店舗・空き家利活用促進事業がある、空き店舗・空き家については宅建協会が実施しているとの事本市も所管を宅建協会に一本化出来ないだろうか？

札幌市から車、JRで約30分通勤可能な地ではあるが、大変な豪雪地であり人口減少に歯止めが掛らないのが現状である。



質問・答弁及び所感

福田 文治 議員

視察事項 東川町 写真甲子園、映画写真甲子園制作事業について

問

答

問

答

所感 面積247K平方キロで人口8000人余りのまちであるが大雪山国立公

園区域の一部に有り豊かな田園風景など優れた自然景観に恵まれているまちで

あり写真文化による町づくりを選んだ大きな要因である。

昭和59年開拓90周年を迎え「町民が参加し、後世に残せる町づくり」を模索

民間企業からの提案でモノではなく文化で町づくりを目指し「写真の町」宣言を

行い町づくりに取り組んだ結果、写真甲子園「全国高等学校写真選手権大会」が

今年で24回も続き初回161校から1900校のうち11ブロックに分け526校が

参加する大きな大会となり、美しい自然景観や街並みの形成、住民参加の増加、

「写真の町」東川町らしいデザインされた空間を生み出し定住人口・交流人口・

起業の増加。国内外と写真文化を通じた交流、ネットワークの広がり等の成果

製作費1億円で「写真甲子園0.5秒の夏」を映画化国の交付金7千万円、

大口寄付金2千万円あるものの宣伝費が1～2億円との事9月から全国ツアー

に町職員2～3名付いて行く本気度には感心した。また足りない費用については

ふるさと納税で賄うとのこと夢のある事業に町民、職員生き残りをかけての取り

組みは素晴らしいものを感じた。

## 周南市議会六合会行政視察（平成29年8月1日～3日）報告書

藤井康弘

### 【視察先選定の理由】

議員の視察に厳しい目が向けられている昨今「夏に北海道に視察！」ということになれば、「北海道ありきの観光旅行がてらか!?’という疑惑を持たれるのは不可避と言える。私も、当初は「ん？北海道...」と長嶺議員の立てたプランに抵抗感を覚えた。しかし、実際に現地に赴いて勉強したいと考える所に順位付けしたら上位を占めた所がたまたま北海道にあったということであった。そして、視察を終えた今は、わざわざ北海道まで行っただけの価値はあったと胸を張って言え、企画した長嶺議員には感謝しているところである。

具体的な視察先選定の理由は、次の通りである。

- ① 今年2月に周南市議会議員研修会に来ていただいた「ささえる医療クリニック岩見沢」の永森克志先生の講演内容に感銘を受けた長嶺議員が、永森先生の運営されている岩見沢の「まるごとケアの家」の現場をぜひ視察したいと考えたこと。
- ② せっかく岩見沢市を訪問するのであるから、岩見沢市が力を入れている移住促進事業を勉強させて頂こうと考えたこと。
- ③ 周南市も林忠彦賞によって文化政策として写真に深く関わっていると言えるが、「写真甲子園」を運営するなど写真をまちづくりの中心にしている東川町が、今回その写真甲子園をテーマにした映画も作成されたということで、どのように写真文化振興をまちづくりに生かしておられるのか現場を見て参考にしたいと考えたこと。

### 【視察の日程と概要】

8月1日早朝、福田健吾、青木義雄、福田文治、長嶺敏昭、佐々木照彦、藤井康弘の六合会所属議員全員徳山駅に集合。6月に三輝会と静林会が合併して誕生した六合会（周南市議会最大会派）としては最初の行政視察となり、当然今後の議会活動を睨んで6人の結束を強めることも目的となる。新幹線で広島まで行き広島空港から空路千歳空港へ（ちなみに、私は



飛行機に乗るのは20年ぶり)。そこからはすべて会派長兼運転手である福田健吾議員の運転するレンタカーで移動(三日間の強行軍、ご苦労様でした)。

①最初の視察先は、岩見沢市の永森先生のクリニック。医院と隣接する訪問看護ステーションなどがある「まるごとケアの家・岩見沢」を現地視察。そして、夜は先生と病院・施設のスタッフの皆さんと懇談会で意見交換。私は、先生の隣の席だったので、認知症患者の介護のあり方から少子化の社会的要因、さらにお互いの死生観に至るまで先生と長時間にわたって議論することができ、有益だった。

②二箇所目は、岩見沢市役所を訪問。移住担当の職員の方から岩見沢市の現在行っている移住施策について説明を受けた後、移住希望者用のお試し居住施設を現地視察。

③最後の視察先は、東川町。町内を見学した後、町役場で町長と町議会議長から「写真の町」宣言の経緯と「写真甲子園」の現状及び映画作りなどについて直接説明を受ける。

※なお、途中少し時間に余裕があったので、欲張って旭山動物園を視察することに。閉園まで1時間しかなく、代表的な施設を老体に鞭打って駆け足で見て回ったが、マスコミ等で情報を得ているからであろうか、私は初めて来たのにも拘わらず非常に既視感が強かった。どんなに斬新な施設でも常に陳腐化のリスクと隣り合わせの運命にあることを実感することになった。

以上で視察は終了し、8月3日、千歳空港から、帰路につく。そして、広島空港に着いて機外に出た瞬間、スーツの上着を着ていても暑いと感じることはなかった北海道との違いに愕然とし現実に引き戻された感じがした。



### 【ささえる医療クリニック岩見沢視察感想】

実は、私は、須々万中学校学校運営協議会に会長とし出席する必要があったため、2月の職員研修会は欠席し永森先生の講演を聴講していない。従って、現地視察の前提知識を欠くため、住宅街の中の普通の民家（空き家）を改修した極めて簡素なクリニックや訪問看護ステーションやコミュニティ室を見学しても、経費の削減を目的としたものとしか思い付かず、その本当の意味がよく分からなかった。しかし、先生の説明を聞いているうちに、先生が何を改革しようとしているのか分かってきた。

要するに、病院は、治療する所であって介護をする所ではない。しかし、もはや治療しても治癒する見込みのない多くの高齢者も、病院に入院して手厚い治療を受け延命治療を経た末に病院で最後を迎えているというのが現状である。これは、限りある医療資源の有効な活用とは言えない。治療ではなく介護が主として必要な高齢者に、必要最小限の治療と十分な介護を、その人がそれまで暮らしてきた地域の中で提供して、安らかな最後を迎えてもらおうというのが、「ささえる医療クリニック」と「まるごとケアの家」に他ならない。そこには、就業場所のない地域における雇用の創出という狙いもある。

間違いない正しい方向であるが、一般化するためには、我々1人1人の死生観も含めた老いに対する考え方の見直しが必要だろう。なぜなら、現代版姥捨て山かという誤解を受けるおそれもあるからである。

### 【岩見沢市視察<sup>感想</sup>報告】

人口減少に危機感を持つ日本全国の自治体が移住施策を展開しているが、全体的な人口減少と若年層の大都市への社会的集中という大きな流れの中で、どこも苦戦しているのが実情である。岩見沢市も、各種メニューを用意して努力されているが、実績は芳しいものではないというのが現実だった。

## 【東川町視察感想】

正直に言うと、今回の視察まで私は東川町のことを全く知らなかった。多分それは、東川町が写真甲子園などの成功で文化政策による町おこしの希有の成功例として全国の自治体関係者の注目を集めるようになった時期に、ちょうど私は議員を辞めて政治の世界から全く離れてしまったので東川町に関する情報に接することがなかったからであろう。

しかし、今回の視察を契機に東川町のことを知って、こんな凄い自治体があったのかと一種のカルチャーショックを受けた。もちろん、人口35万人の旭川市から車で30分程度、旭川空港からは車で13分以内という地理的条件と雄大な大雪山国立公園という観光資源に恵まれているという優位性があることは間違いないが、全国的には同等の条件に恵まれていても、それを生かすことができず人口減少に歯止めをかけることができない自治体がほとんどである。なぜ、東川町だけは人口減少に歯止めをかけ、あまつさえ人口増に転換することができたのか？

その問いに対する正確な解答は、たった半日の視察で出すことは不可能であり、実際に写真甲子園が開催されている期間中に東川町に泊まり込んで調査する必要があるだろう。機会があれば、ぜひそうしたいところだが、今回の視察で理解できた限りで（多分きわめて表面的な理解であろうが）述べてみたい。

やはり、何よりも「写真の町」という発想が秀逸だったと言える。別段東川町は写真と何らかの関わりがあったわけでもないのに、ただ被写体となる自然に恵まれているというだけの理由で、半ば強引に日本で最初に写真の町宣言をして、少なからずあった町内の反対にもめげることなく、各種施策を展開・継続し、ついに「写真甲子園」という一大イベントに結実させた。つまり、優れた発想とそれを採用するトップの柔軟性と勇気、そして、それを貫く強い意志と成果が出るまで続ける忍耐力。どれが欠けても東川町の成功はなかったと言える。

なお、誤解がないよう断っておかなければならないのは、写真の町と

いう文化政策による町のブランド化だけで移住者が増えて東川町の人口増に繋がったわけではないということである。他の自治体と同様あるいはそれ以上の実体的な移住促進施策を東川町も用意している。その上で、写真の町というブランドが上質な移住者や企業を呼び込み、その人たちによって魅力あるカフェなどが町の中に立地し、それがまた移住者を呼び込むという好循環を生んでいるのである。

また、いささか逆説的になるが、東川町が人口が1万人に満たない小規模な自治体であったことがかえって良かったとも考えられる。例えば、周南市が同様の事業をする場合、おそらく自前の一般財源で必要な経費を賄ってしまうだろう。ところが、東川町の場合そのような自前の財源は用意できないので、外部から調達してくる他ない。実際、東川町では事業に必要な経費を調達するために職員が東京に行って企業を回って営業活動をしている。通常、公務員をしていると民間企業から頭を下げられることはあっても頭を下げることはない。ところが、東川町の職員は民間企業に頭を下げて営業するのが当たり前という感覚が養われている。最近では、しばしば「役所はサービス業」ということがどこの自治体でも言われているが、看板倒れで実態は旧態依然ということが多いが、東川町の場合は違う。ちなみに、東川町役場では、「前例がない」「他でやっていない」「予算がない」という3つのないは禁句だそうである。このような役所の風土が事業を成功に導いたことは間違いない。これこそが、何よりも周南市が見習わなければならないことだろう。